

〔資料紹介〕

広島大学図書館蔵 契沖『和字正濫要略』

—「山岡浚明大人朱書入」翻刻—

赤迫 照子

はじめに

広島大学図書館貴重資料室蔵の古典籍は、その殆どが広島大学文学部文学科国語学国文学教室旧蔵のものである。広島大学が広島市東千田町にあった当時、古典籍は各教官室に保管されていたが、平成六年、文学部が東広島キャンパスへと移転した際、一括して広島大学中央図書館の貴重資料室に移管された。

これらにはカード目録と数種類の冊子目録が存するが、資料の検索には簡便性を欠く。そこで稿者が所属する広島大学図書館研究開発室では現在、「広島大学図書館貴重資料室蔵 古典籍データベース（仮称）」の構築作業を進めている。本稿ではその中で出会った資料の一つ、契沖『和字正濫要略』（図書番号国文一五八一N、登録番号一〇三三八）を紹介したい。

当該資料はカード目録以外に、東広島移転以前に作成された冊子

目録『広島大学文学部国語学研究室蔵（小林芳規研究室保管分及び中央図書館保管分）写本・版本目録』にも書誌情報が記載されている。しかし、ガリ印刷のこの目録は公刊されておらず、一部の利用に止まる。また、当該資料は『国書総目録』や国文学研究資料館ホームページ「日本古典籍総合目録」に記載がない。

『和字正濫要略』の翻刻は、『語学叢書』第一編（赤堀又次郎校訂 明治三十四 東洋社）、朝日新聞社『契沖全集』第七卷（上田萬年 監修、新村出・佐々木信綱・橋本進吉・武田祐吉・久松潜一編 昭和二 以下「朝日版」）、岩波書店『契沖全集』第十卷（久松潜一監修、築島裕・林勉・池田利夫・久保田淳編 昭和四十八 以下「岩波版」）の三点がある。本稿で翻刻するのは当該資料の大きな特徴である。「山岡浚明大人朱書書入」部分と奥書のみで、本文は適宜、前掲書を参照されたい。

結論からいえば、当該資料は江戸時代の和学者山岡浚明（享保十 一（1726）〜安永九（1780））自筆書入本ではない。本稿では当該資料を起点として、浚明が関与した『和字正濫要略』享受の様相を探ってみたいと思う。

一 契沖『和字正濫要略』について

契沖（寛永十七（1640）〜元禄十四（1701））が著した『和字正濫要略』は、『万葉集』等の典拠を示しながら仮名遣の濫れを正した書で、いわゆる「歴史的仮名遣」の基となった。元禄八年に刊行され、以

降、契沖の説は和学者達に継承されていくことになる。翌年の元禄九年、契沖の説を批判した橋成員『倭字古今通例全書』が出版されると、契沖は元禄十年、『和字正濫通妨抄』を著し、橋成員を痛罵した。しかし、『和字正濫通妨抄』は出版はされておらず、流布していない（現存は契沖自筆稿本のみ）。契沖はさらに研究を深め、元禄十一年、『和字正濫鈔』を再考し、約三百語の仮名遣を説明した『和字正濫要略』を著す。

『和字正濫要略』は、契沖自筆本は確認されていない。出版されず、写本で伝わる。伝本は多く、『国書総目録』・『日本古典籍総合目録』には約五十点が確認される。伝本系統は未解明だが、朝日版凡例と解説・岩波版の解説によれば、中でも重要な本文は、最も祖本に近い形の大府立図書館蔵圓珠庵本（二冊 以下「圓珠庵本」と、契沖の高弟似閑（明暦三（1657）〜享保八（1723））の自筆書入がある賀茂別雷神社三手文庫本（一冊 以下「三手本」）である。

稿者は詳細な伝本調査に至っておらず、『語学叢書』・朝日版・岩波版の翻刻と、インターネット上で閲覧可能な早稲田大学図書館所蔵本（二冊 以下「早大本」）、大阪市立大学学術情報総合センター所蔵の小竹園旧藏森繁夫文庫本（二冊 以下「森文庫本」）の本文を確認したにすぎない。

『語学叢書』・朝日版は三手本を底本とする。朝日版の方は圓珠庵本・竹柏園藏鷹司家旧蔵本・同蔵古香齋旧蔵本も用いて本文を定める。岩波版は圓珠庵本を底本とし、三手本で校合する。

圓珠庵本は全て同筆で、朱の加筆が僅かにある。岩波版解説は筆跡が契沖に似ること、圓珠庵に契沖自筆本が数多く伝えられていることから、契沖が書生に書写させた本かと推測する。奥書は契沖識語「元禄十一年^{庚辰}五月初八日 契沖」があるのみである。

三手本は筆者不明だが、似閑が人に書写させたものとみられ、似閑自筆の書入が多数存する。後人の加筆も認められる。本文には誤写が多く、似閑はそれに訂正をしているが、その訂正結果は圓珠庵本と一致する場合とそうでない場合がある。よって似閑がどのような本を書写せしめ、訂正に用いたかは明らかでない。書入には似閑の説を述べたものもある。中でも特に長大なのは契沖序への書入（本稿では〈似閑書入〉と称す）である。〈似閑書入〉を持つ本は多いようで、三手本はそれらの共通祖本ということになる。広大本・早大本は〈似閑書入〉が存する。圓珠庵本・森文庫本にはない。奥書は契沖識語と「寶永四年五月上旬一校畢」、宝永六年の似閑奥書である。

なお、朝日版で校訂に用いられた竹柏園藏鷹司家旧蔵本・古香齋旧蔵本は、岩波版で所在不明と報告されている。岩波版では、東京大学国語研究室所蔵の一本（登録番号J26300）が竹柏園藏鷹司家旧蔵本に似ていることから、底本との異同を適宜注する。

早大本は奥書は三手本と同じで、さらに「享保九甲辰年孟秋中院写畢 某」がある。森文庫本は上冊遊紙に荷田春満（寛永九（1669）〜元文元（1736））の別名「荷田東丸」と書かれてある。末尾には「契沖」とだけあり、他に奥書はない。〈似閑書入〉や他の書入もない。

二 書誌

広島大学図書館蔵契沖『和字正濫要略』（以下、「広大本」と略す）は写本、上下二冊。虫損が多く染みもあり、下冊は裏表紙が剥離している。保存状態は良好とは言い難いが、閲覧に支障をきたす程度ではない。装丁は袋綴。料紙は楮紙。縦二三・五cm×横一六・八cm。表紙は薄茶色無地。墨付丁数は上冊七一丁、下冊六三丁。上下冊とも巻頭・巻末に遊紙が各一丁ある。一面は九行だが、上冊（似閑書入）六丁表は一行分のスペースに二行書き込んだ行が四行あり、一三行になっている。また、〈引證書目〉八丁表は一〇行。本文と書入、奥書は全て同筆である。

上下冊とも表紙左上の縦一六・七cm×横三・一cmの題簽に、「和字正濫要略 上（下）」と墨書されている。上冊は「上」の下に、下冊は「略」と「下」の間に直径一・二cmの陽刻丸の朱印があるが、手擦れ等で判読不能。同印は上下冊巻頭の遊紙にも存する。序題「和字正濫要略」、巻首題「和字正濫要略」、尾題「和字例終」。小口書「上（下）和字正濫要略」、続いて「廣大蔵書」の朱印がある。

上冊見返に「山岡浚明大人朱書入」と墨書された短冊様の貼紙がある。貼紙は縦一三・一cm×横三cm。上下冊とも一丁表に「蘭□家蔵」（陽刻縦長方形 縦三・八cm×横〇・九cm）、「広島大学圖書之印」（陽刻縦長方形 縦五・七cm×横二cm）の朱印がある。「齋藤文庫」は『江戸名所図会』の編者齋藤月岑（文化元〔1804〕「齋藤文庫」は『江戸名所図会』の編者齋藤月岑（文化元〔1804〕

明治十一（1878）の蔵書印。上冊巻末の遊紙裏右下に「楠」の黒印と、上部には黒ペンによる「俊明朱書入」「ヲ大人」の記入がある。下冊は「濱市」の黒印と、「午二ノ二ゐ」「ウニ母□ノ」「子十一□□□□」の墨書がある。下冊の四八丁表下欄に縦二・五cm×横二・六cmの付箋があるが、何も記入はない。

その他、図書館の印記について記す。上下冊見返「広島大学圖書之印」（朱）、「広島大学圖書・文・10338」（藍）。上下冊見返、上冊巻頭の遊紙、一丁表「國語國文学教室」（藍）。上冊一一丁表、下冊六丁表「広島大學」（朱）。

昭和三十一年度の図書出納簿によれば、広島大学文学部文学科国語国文学教室が昭和三十二年二月二十五日、沖森直三郎から購入している。当時の教官は土井忠生、岡本明、藤原与一、金子金治郎、真下三郎、この年度に着任したばかりの稲賀敬二。助手は田井庄之助、清瀬良一。沖森直三郎は三重県上野市（現伊賀市）の古書肆沖森書店の店主である。⁸⁾

三 構成

次に、広大本の構成を示すために標目名・丁数を記す。なお、契沖による序は二つあり、〈契沖序1〉、〈契沖序2〉とした。

【1】契沖序1 上冊 一オウ 五ウ

【2】似閑書入 六オウ 六ウ

【3】契沖序2 七オウ 七ウ

【4】 引證書目

八才〜 八ウ

【5】 和字正濫通始抄(ついで) 補改

九才〜一八才※一八ウ空白

【6】 い

一九才〜二四才

【7】 中下のい

二四ウ〜二七ウ

【8】 ゐ

二八才〜二八ウ

【9】 中下のゐ

二九才〜三〇才

【10】 ひ

三〇ウ〜五三才

【11】 を

五三ウ〜六七才

【12】 中下のを

六七ウ〜七一才※七一ウ空白

【13】 お

下冊

一才〜一八才

【14】 中下のお

一八ウ〜一九才

【15】 中下のほ附をおにまきるゝを出す

一九ウ〜二六ウ

【16】 え

二七才〜二八ウ

【17】 中下のえ

二九才〜三四才

【18】 ゑ

三四ウ〜三七才

【19】 中下のゑ

三七ウ〜四二才

【20】 中下のへ

四二ウ〜四五才

【21】 中下のわ

四五ウ〜四九ウ

【22】 中下のは

五〇才〜五二才

【23】 中下のう

五二ウ〜五五ウ

【24】 中下のふ

五六才〜五七才

【25】 むとうと通する類

五七ウ〜六一才

【26】 音便むと聞ゆれとうと書へき類 六一ウ〜六二ウ

【27】 奥書 六三才〜六三ウ

圓珠庵本他三本と比べると、構成等に大きな違いが見られる。

第一に〈似閑書入〉の位置である。似閑自筆書入の三手本では朱書で、〈契沖序1〉の欄外にあるが、広大本では〈契沖序1〉の後に丁を改めて〈似閑書入〉を設けており、本文とほぼ同様の体裁で書かれている。また〈契沖序1〉と区別するために、六丁表1行目「音をも無窮に——」に「此ヨリ下ハ似閑老人の加筆なり」と朱で頭書されている。早大本も〈契沖序1〉に続いて〈似閑書入〉を載せるが、丁は改められていない。ただし、五丁裏3行目「音をも無窮に——」に朱の鉤線を付し、さらに欄上に似閑書入であることを朱で注記して〈契沖序1〉と区別する。これは契沖序の中の「音をも無窮にかくにさはる事なし」の書入だったものを、三手本及びその系統の本の書写過程において、書写者が読みやすさを優先させ、欄外から独立させたものであろう。

第二は〈引證書目〉の位置である。広大本では〈契沖序2〉と本文の間にあるが、三手本では表紙見返の貼紙に別筆で記されている。早大本は広大本と同位置にある。圓珠庵本・森文庫本には存しない。ちなみに、記載の書名は三手本・早大本と一致するが、例えば三手本には「古今」とあるのを広大本は「古今集」としていたり、三手本には末尾に「己上」とあるが広大本にはない等、少々異同がある。

第三は項目名の体裁である。【6】〈い〉〜【26】〈音便むと聞ゆれ

とうと書へき類》では、例えば「**臈**」のように項目名を四角で囲んでいる。早大本・森文庫本は字を囲っていない。朝日版・岩波版にも、圓珠庵本等がそのような体裁であったという報告はない。

ところで、本文異同は未調査なのだが、圓珠庵本と同じ脱文があることだけ指摘しておきたい。岩波版解説は、圓珠庵本に三つの大きな脱文、

・ 檀日宮「これを○和名には」の○の部分「古事記には、筑紫訶志比宮、万葉には、香椎、これを」

・ 晩稻「これに同じ、○おしねといふ」の○の部分「おそいねといふべきを、そいをかへせばしとなる故に、つゞめて」

・ あえ「とあれば、○歟、さるにも」の○の部分「薑蒜を擗合せぬ常にあへものといふには、和の字を用めん」

があると報告している。広大本も上冊三七丁表1行目、下冊一五丁表8行目、三〇丁裏8行目と、全く同じ脱文がある。

このように、広大本は三手本の〈似閑書入〉を持つが、圓珠庵本に近似する面もある。

四 「山岡浚明大人朱書入」・奥書翻刻

さて、問題の「山岡浚明大人朱書入」と奥書の翻刻を記す。朱書のみで、墨書はない。書入が存するのは【1】〜【7】、【10】〜【13】、【15】、【16】、【20】、【21】、【23】、【25】、【27】である。

先に、書入について気付いた点を列挙しておく。校訂や異本注記

が多く、説を述べたものは少ない。前述のように書入は本文と同筆で字は乱れておらず、墨による見せ消・訂正は全くない。

書写者は親本の書入をなるべく忠実に写したように見受けられる。例えば、似閑奥書に「和字正濫抄五卷い ゆる古書を引證して」と、「い」と「ゆ」の間にわざわざ一字分空けてあり、そこに「は」と書かれてある。これは「は」が字間に補入されていた親本の姿を写そうとしたからであろう。ただし、これと同様に空白を設けた例は他になく、補入の場合は殆ど補入記号「○」を用いている。

「○」が字の中にある場合は、補入記号ではなく見せ消らしい。見せ消には字中に「○」を記すのと、左に点を二つ記す二種の方法を用いているようである。左に点が一つある場合は異本注記か、「○歟」と案を示すかのいずれかである。

書入の内容については、三手本の似閑書入と一致するものがある。例えば、下冊一六丁表2行目にあげられた和歌「かつしかのわさ田のをしねこきたれてなきもたゆれとこさぬなみたか」の右肩の書入「散木集に」は三手本にもある。

三手本と別種のものには、『和字正濫鈔』との対応について注したものがあつた。例えば、【5】〈和字正濫通始抄 補改〉一六丁表6行目の項目名「蚰蜒なめくち」の右に、「濁るちの類に入」とある。これは「蚰蜒なめくち」の項目が『和字正濫鈔』で「中下に濁るち」に分類されているのを述べたものである（岩波版解説に指摘があるが、実は〈和字正濫通妨抄 補改〉は、『和字正濫通妨抄』ではなく

『和字正濫鈔』の訂正・増補をあげた箇所である。

不審な箇所もある。例えば、【10】(ひ)四三丁裏7〜8行目「ゐくひは堰^{せき}杖にてゐせきの所にうつ杖なり」の書入は「ゐくひは堰杖にてゐせきの所にうつ杖也」と本文と同文で、何のために記したのかわからない。不審といえ、【5】の標目名「和字正濫通始抄 補改」は、正しくは「和字正濫通妨抄 補改」である。しかし、これには訂正等の書入は全くない。

奥書から、浚明が『和字正濫要略』の校訂に熱心であったことが窺える。そのような浚明の姿勢をふまえれば、例にあげたような不審な箇所があり、また、圓珠庵本と同じ脱文三箇所について全く何書入がない広大本は、浚明自筆書入本とは考えられない。

〔凡例〕

- 一、底本の変体仮名は全て現行の字体に改めた。
- 一、漢字については可能な限り底本の字体を尊重したが、原則としてJIS規格に含まれる字体の範囲に限ったので、必ずしも厳密ではない。
- 一、踊り字は「ゝ」「く」に統一した。
- 一、「丁・行」には書入箇所^①に該当する丁・行数を記した。
- 一、「本文」には書入がある本文部分をあげ、書入のある箇所に傍線を引いた。書入が複数ある場合には、①②のように適宜番号を付している。なお、読みやすさを考慮して、書入の前後の行の語句も載せた場合もある。その場合、改行の箇所にとじ括弧

(一) を付した。

一、【5】以降にある「項目」には項目名(漢字表記と仮名表記両方がある場合は漢字表記のみ)を記した。

一、「書入」には書入の翻刻、その位置等の情報を記した。

一、点が二つの場合だけを「見せ消」とした。

一、返り点が書き入れている場合は、返り点が付された状態を「」内に記した。

一、□は手擦れ・虫損で判読不能の箇所である。

上冊

【1】契沖序1

丁・行	本文	書入
一才8	今哥書に用る言の中について常に人の「まかへぬをはおきて	欄上「○常に」
一ウ7	あふことに今をかきりのこひなれや	①右「よ」 ②右「は」
二才4	かたはなる事も出来へし弘計王は弟にておはします億計	欄上「億計王弘計王は兄弟にておはします」
5	王は「兄にて後に位につかせたまひて仁賢天皇と申す弘計王は顕宗天皇也古事記に	①「し」「弘」字間に補入記号「○」、「弘計」右「をけ」
6	は「意祁王袁祁王とかゝれた	②③④右 ②「おけ」
7		③「オケ」④「オケ」

8	り億 <small>①</small> 意はともに假名「お弘 <small>②</small> 袁はとも <small>③</small> にをなり億 <small>④</small> は大の義弘 <small>⑤</small> は小な <small>⑥</small> 」るへし計 <small>⑦</small> は何と義 <small>⑧</small> といふ事 <small>⑨</small> いまたしらす <small>⑩</small>	⑤「ヲケ」⑥「オオ」⑦「ヲヲ」⑧「オ」⑨「ヲ」⑩見せ消、右「の」
ニウ6	かなの事はつやくたつぬる	右「しらぬが」
三オ6	於 <small>ト</small> 於遠 <small>ト</small> とかきたるとも	右「も」
三ウ1	神武天皇の御誦に「於費異之とあるを古事記には於斐之とあり	①右「オヒイシ」 ②右「オヒシ」
4	おほへといふ時は平声	右「つ」
6	おの字をかへてを「書ことなし	見せ消、右「と」
四オ1	これは入聲 <small>ト</small> にも輕 <small>ト</small> あれば平声 <small>ト</small> に引て「准ずをは <small>ト</small> といふは上声 <small>ト</small> をとめ <small>ト</small> といふは去声 <small>ト</small> 亦声 <small>ト</small> によりて	①②③④⑤⑥⑦字間に読点 ④濁点
3	三聲 <small>ト</small> はあり入声 <small>ト</small> は和語にすへてなし以呂波 <small>ト</small> といふもの出	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨字間に読点
6	来て後四十七字をもて和語はいふに「をよはず音をも無窮	⑧右「イニナシ」
7	にかくにさはる事なし「音を	
8	からは假名は同しくて字の	

9	たにて「平声上去入をわかつなりかなたの四声の	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬
ウ1	字をかりこなたの和訓の字を	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬
2	あはせて無窮に「傳受して用るなりまさしく仮名のまきる	⑭⑮⑯字間に読点
3	は「五十音の中にあいうえ	⑰右「三」
4	を「やいゆえよわゐうゑ」お此	⑱「わ」の右「あ」
5	三行のうちを出すいろには「此中にい」えうの三音をはふ	⑲字間に補入記号「○」
6	かれて残る十二字のうちい	右「ふの」
7	る「えゑをおの三對六字これ用ゐわくへき字也」其外はは	
8	ひふへほの中下にありてわい	
9	うえを「と聞ゆる音便またあふり <small>ト</small> あふひ <small>ト</small> 」等ののをやうに聞え	
五オ2	知やすき「事なり字を反す	字間に読点
4	定まれと和語にかく時	濁点
5	いる等をわかつなり汪ノ切字	①字間に読点、「汪」の右下
8	欲ノ切餘ノ切	②右「丁」
		字間に補入記号「○」

「餘」の右「戈ノ切イ」

【2】 似閑書入
 六才1 音をも無窮に——
 右肩「此ヨリ下ハ似閑老人
 の加筆なり」

【3】 契沖序2

七才1	雙六ノ下端ニ	右「ハ」
2	五一ハ三ニノ石ヲ下ルコト ノ多ハ少レハ	全て右①「クイチ」 ②「サン」③「オ」 ④「アタハザレバイニ」
3	四一ハ重ニヲオロサネハ	濁点
4	四ツニ及ハス	濁点
7	信スレハ	①濁点
8	盲「ノ見サルニ劣レリ	濁点
七ウ1	金銚ヲ投テ手ヲ拱ク	①左に点、右「銚イニ」 ②右「タムタ」
2	盲警不 _レ 畏 _レ 蛇ト街談巷説モ採ヘ キコトアリトハ	①返り点「不 _レ 畏 _レ 蛇」 ②濁点

【4】 引證書目
 八才1 引證書目
 「一本引書目尻シ」

【5】 和字正濫通始抄 補改
 丁・行 項目 本文 書入
 九才5 以作威 日本紀には稜威をいつとよ 欄上「漢書武帝報廣

8	雲聚	雲聚 ^D うす ^P	①右肩「濁るすに出 たり」②濁点
六才6	蚰蝓	蚰蝓 ^D なめくち ^P	①右肩「濁るちの類 に入」②濁点
五ウ4	燭	燭 ^D けふたし ^P 和名	右「むに誤れるふの 類イニリ」
二ウ9	覆	覆 ^D おほふ ^P	右「〇一本ニ第三卷 とアリ」
ウ3	撥鬢刷	玉篇に所劣切滅也	右「拭イ」
オ9	威稜	此云伊都と注あり	返り点「云伊都と」
二オ3		いよゝとこ _レ こ _レ れ _レ ま _レ さ _レ れ _レ り	字間に補入記号「〇」 補入「あり」
7	彌	彌 ^D 万葉 ^P いとゝ	右「いよゝ」
二ウ3	罄余	あれとはいはず	濁点
7	稜	めり韻會に前「漢を引て云 李廣傳稜 ^D 李奇曰補靈威曰稜 ^D 嚴ノ字をいつとよめるに意 同し	日威稜儻于隣國」 ①字間に補入記号 「〇」、右「威」 ②字中に「〇」 右「神」

三ウ8	飯	和名筆 <small>以伊之太美</small>	字中「〇」、右「比」
三ウ7	當麻	履中紀に當麻住 <small>クキマヅ</small>	字中「〇」、右「侄」
【10】ひ			
三ウ8	印南野	印色二字以 <small>レ</small> 音 <small>ヲ</small> 今注す	右「と敷」
【6】い			
一オ1	第 <small>一</small> 卷 <small>一</small>	古き朗詠の点に「ア」フサ く <small>レ</small> と <small>レ</small> 点す	①②左に点 ③「此二字イニナシ」
9	随分	随分 なつさく <small>白氏文集</small>	濁点 欄上「なづさく」濁 るつの類に入
6	随分	随分 ちしろ	字中「〇」、右「莖」
一オ4	筵	おはとあり	濁点
8		上に於保波 <small>ノ</small>	濁点
4		祖母 うは	濁点
二ウ3	祖母		
三ウ8	飯	和名筆 <small>以伊之太美</small>	字中「〇」、右「比」
三ウ7	當麻	履中紀に當麻住 <small>クキマヅ</small>	字中「〇」、右「侄」
【10】ひ			
三ウ8	印南野	印色二字以 <small>レ</small> 音 <small>ヲ</small> 今注す	右「と敷」
【6】い			
一オ1	第 <small>一</small> 卷 <small>一</small>	古き朗詠の点に「ア」フサ く <small>レ</small> と <small>レ</small> 点す	①②左に点 ③「此二字イニナシ」
9	随分	随分 なつさく <small>白氏文集</small>	濁点 欄上「なづさく」濁 るつの類に入
6	随分	随分 ちしろ	字中「〇」、右「莖」
一オ4	筵	おはとあり	濁点
8		上に於保波 <small>ノ</small>	濁点
4		祖母 うは	濁点
二ウ3	祖母		

三オ2	桶	麻笥は今の俗 <small>ノ</small> ごけとも	右「を敷」
五ウ4	折	又あをやきとうめ <small>ノ</small> 花を	字間に補入記号「〇」
9		おひいてさらまし	右「と」
三ウ8	姨	鳥の子のまたかひなからあらませは <small>ノ</small> を <small>レ</small> は <small>レ</small> といふ物は	欄上「おひのかなは たかへり乎比なり」
五ウ1		第はつ手波奈はな <small>ニ</small> みんと	字中「〇」、右「又」
ウ6	尾	鞍 <small>平不</small>	字中「〇」、右「鞍」
【11】を			
五オ3	雄	神代紀に	字間に補入記号「〇」
四ウ3	鵠	鵠 <small>ノ</small> く <small>レ</small> ひ	濁点
6	杙	應神記に「委愚比菟區古事 記に韋具比字知 <small>ル</small> くひ」は	欄上「ぬくひは堰杙 にてゐせきの所にう
7		堰杙 <small>キヅヒ</small> にてゐせきの所にう <small>ツ</small>	つ杙也
8		杙なり	濁点
四オ9	株	疎 <small>ノ</small> く <small>レ</small> ひせ	濁点
四ウ6	椎	應神天皇 <small>ノ</small> の御哥 <small>ニ</small> 志比 <small>ノ</small> 斯那伊知比韋能 <small>スナイチヒケノ</small>	字間に補入記号「〇」
【11】を			
三オ2	桶	麻笥は今の俗 <small>ノ</small> ごけとも	右「を敷」
五ウ4	折	又あをやきとうめ <small>ノ</small> 花を	字間に補入記号「〇」
9		おひいてさらまし	右「と」
三ウ8	姨	鳥の子のまたかひなからあらませは <small>ノ</small> を <small>レ</small> は <small>レ</small> といふ物は	欄上「おひのかなは たかへり乎比なり」
五ウ1		第はつ手波奈はな <small>ニ</small> みんと	字中「〇」、右「又」
ウ6	尾	鞍 <small>平不</small>	字中「〇」、右「鞍」
【11】を			
五オ3	雄	神代紀に	字間に補入記号「〇」
四ウ3	鵠	鵠 <small>ノ</small> く <small>レ</small> ひ	濁点
6	杙	應神記に「委愚比菟區古事 記に韋具比字知 <small>ル</small> くひ」は	欄上「ぬくひは堰杙 にてゐせきの所にう
7		堰杙 <small>キヅヒ</small> にてゐせきの所にう <small>ツ</small>	つ杙也
8		杙なり	濁点
四オ9	株	疎 <small>ノ</small> く <small>レ</small> ひせ	濁点
四ウ6	椎	應神天皇 <small>ノ</small> の御哥 <small>ニ</small> 志比 <small>ノ</small> 斯那伊知比韋能 <small>スナイチヒケノ</small>	字間に補入記号「〇」

6	ぬりをけともいひて 延喜式第十五内蔵式云水瓶 麻笥三口、麻笥五口、	文字上補入記号「○」 右「水」
---	---	--------------------

【12】中下のを

六ウ8	杜鹿	紀小鹿女郎といふ女第四 第八に見えたりも	見せ消、右「る」
六オ5		棹竿の字をかれるを	見せ消、右「に」

下冊
【13】お

一ウ8	鬼	漢音は「いんなり」	右「ゐい」
三オ3	棘	彼卿の為遠卿	字中「○」、右「末」
三ウ9	劣	乎遲奈伎夜和礼、尔於止礼 留比止乎於保美	字中「○」、右「墀」
四ウ1	織	仁徳紀にめとりか於璫かな はた古事記に「仁徳天皇の 御哥にめとりのわかおほき み」の	①②濁点
4		古語たゝ織なり	右「にてい」
四ウ9	晩稲	おしねかるしつのすかゝき 白妙に	右「さ」
一オ1		小稲と心得られたるなり	下欄「□□□此哥わ さ田のをしねとあや

2		かつしかのわさ田のをしね こきたれて	まれる類なり 右「散木集に」
4		仁徳天皇紀に天皇の御哥に 於辞氏屢なにはのさきの ならひ濱頭宗紀に截末此云 ①左「此より僻文な り」	①から②までを鉤括 弧で囲む
5		須衛於茲婆羅比	
6		意志波、留加志天見行事 俗にをゝ用ゆ	左に点、右「給い」 左「改むべし」
9	押		
二ウ8	杆麵杖	牟岐於須紀 (以下、一八才空白)	本文に続いて「仁徳 天皇紀に天皇の御哥 に」於辞氏屢なには のさきのならひ濱頭 宗紀に「截末此云 須衛於茲婆羅比」

【15】中下のほ附をおにまきるゝを出す

二四オ2	丁	丁 よほろ	濁点
5	そほつ	そほつ	濁点
6		田にたてゝ鹿鳥などを守る おとろかしなり	欄上「添水又騒水」
三オ6	狂	狂 くるはし	左に点、右「ほ敷」
9	蜻蛉	蜻蛉 こほろぎ	濁点

【16】え

三才4	鳥帽子	和名鈔に俗訛鳥為焉	欄上「俗多ほしと云はあやまり也」
-----	-----	-----------	------------------

【20】中下のへ

四ウ5	にへ	語は饗をあひとともにへともよめは	字中「〇」、右「倍」
-----	----	------------------	------------

【21】中下のわ

四ウ6	結果	古今「集の長哥にかくなわにおもひみたれて〇あり	見せ消、右「よめ」
四ウ6	浦回	うらかゝといふに「おなし	左「〇〇」、右「わ敷」
四才5	沫	萬葉第十一に水阿和	欄上「浚明かんかうふる沫をあはともいふといへるは誤なり萬葉の幡は誤也」

【23】中下のう

三才1	十日	とうかの国尾張へとそえたり	①右「疾ノ心乎」 ②右「彼」
-----	----	---------------	-------------------

【25】むとうと通する類

五ウ5	馬	驢字佐岐無万	字中「〇」、右「麻」
六ウ3	梅	実本には宇梅とあれは	欄上「牟は宇の字カ草の手の書たるへしを誤りたる也」

三才3	筵	音便は「まかはぬと	①見せ消、右「異」 ②字間に補入記号「〇」、右「是も」
		見せ消、右「ね」	

【27】奥書

三才1

浪華 釋 契仲 著

- 2
- 3 ^p 此書は密乘沙門契沖所述作也往昔著
- 4 和字正濫抄五卷い^pゆる古書を引證して
- 5 哥道の便とすしかるに武江の住橋成員といへ
- 6 人^p和字通例書八卷をあらはして新古
- 7 の仮名をましへ正濫を誹謗せる事
- 8 はなはたし^pさるによりて師古事により書
- 9 へき旨を此書に具にのへ給ひ正濫にも添
- ウ1 書し給へりきすへて古人のさためおきける仮
- 2 名をたかへてみたりに俗にしたかふへからさる
- 3 事此書の中に見えたるかことし^p
- 4 于時寶永六^丑正月於六波羅密寺邊一校畢
- 5 洛東陰士 似閑
- 6 右和字正濫要略二本以羽倉在満校本此譬一
- 7 辺畢頗有異同猶異日竣善本校考云
- 8 寶曆十二壬午二月晦 宿祿俊明

■書入

①「元禄十一^{戊辰}五月初八日」 ②欄上「二本此奥書無し」

③「は」「い」と「ゆ」の間に一字分の空欄あり) ④濁点

※二重傍線部分：字間に読点

五 広大本の位置付け

では、広大本は数多ある伝本の中でどのように位置付けられるのであろうか。朝日版・岩波版や、国文学研究資料館「日本古典資料調査データベース」から得られる書誌情報を元に、現調査段階で気付いたことを述べてみたい。

浚明奥書を持つ本は、広大本の他に四本が確認される。まず、東京帝国大学国語教室本（以下「東帝大本」）である。朝日版解説によると、関東大震災で焼失した東帝本の奥書には似閑奥書、早大本と同じ享保九年某奥書、次に、

元文五年庚申年八月初三日

東溟宗博

とあり、続いて広大本と同文の宝暦十二年浚明奥書があったという。注目すべきは、東帝大本には本文に「似閑の書入や「在満」「山岡」などの書入」が存していたことである。広大本には【2】（似閑書入）以外に、記入者の名前が記されているのは、唯一、四八丁表5行目「浚明かんかうふる」のみである。

二本目は静嘉堂文庫蔵松井簡治旧蔵本（以下「静嘉堂本」）である。朝日版解説によれば、静嘉堂本には似閑奥書、享保九年某奥書、宝

暦十二年浚明奥書（つまり、元文五年東溟宗博奥書がない）の次に、

右此兩卷は在満兩度の校本をもてまた浚明氏

異本を得る事兩度はをまた加へ校考して

ふかくひめ置しをこのごろせちにこひて盤溪の

白蓮社中の燈下にうつし畢ぬ

明和六年己丑文中五日

源義亮（花押）

とある。源義亮は安永→天明期、江戸幕臣文化圏に属した人物で、空阿とも称した。『源氏物語』の注釈書『源語類聚抄』を著し、他に物語では国立国会図書館本『しのびね』を書写したことが知られる。

朝日版解説には橋本進吉の調査によつて、静嘉堂本に東帝大本と大体同様の似閑・「在満」・「山岡」の書入があると報告されている。

例えば、静嘉堂本（似閑書入）には「在満云、此文一本ニハ全ク無シテ別の文アリ、イヅレモ契沖ノ詞トハミユレド云々」とあり、また、「山岡云これは在満の考ハわろし。或本に似閑老人の加筆なりといへるをよしとすべし」とある。では、広大本に「在満」「山岡」の書入がなく、（似閑書入）に「此ヨリ下ハ似閑老人の加筆なり」とあることをどう捉えるべきであろうか。現時点では、浚明奥書を持つ本には「在満」「山岡」の書入がある系統と、それが無い広大本の二種が存在するということしかいえない。

三本目は国文学研究資料館蔵石野家本（二冊 以下「石野本」）である。「日本古典籍総合目録」によれば、石野本は宝永六年似閑奥書、宝暦十二年峨眉山人勝在陵奥書、宝暦十二年浚明奥書、明和六年源

義亮奥書を持つ（奥書本文は未見）。

四本目は上越市立高田図書館蔵修道館文庫旧蔵本（二冊 以下「修道館本」）である。「日本古典籍総合目録」の書誌情報を見る限り、奥書は広大本とほぼ同じで、それに続いて静嘉堂文庫本と同文の明和六年源義亮奥書（朱）、そして、

明和八年辛卯季冬初二日写成 源匡英（花押）

とある。また、広大本と同じく尾題に「和字例終」とある。現時点で同じ尾題を確認できたのはこの修道館本のみである。

以上の四本の関係は明らかでない。ただ、東帝大本が浚明自筆書入本であった可能性は大いにあるだろう。では、源義亮が書写した本は東帝大本なのであろうか。ここで問題となるのは、源義亮奥書で閉じる静嘉堂本・石野本の他の奥書が一致しないことである。「ふかくひめ置しをこのごろせちにこひて」という源義亮の物言いからすれば、源義亮は浚明本をできるだけ丁寧に書写したはずであろう。しかし、静嘉堂本には元文五年奥書、石野本には享保九年と元文五年奥書と、東帝大本の奥書が抜けている。浚明奥書と同年の、石野本、宝暦十二年峨眉山人勝在陵奥書も注目されよう。

それにしてもこれら四本に比べて、広大本からは浚明の痕跡を見出しにくい。書入も本当に浚明によるものなのか疑わしくすらある。

「在満云」「山岡云」の部分を後世の者が省き、編集したとは考えにくいから、広大本の書入は東帝大本等とは別種の浚明書入なのか、それとも別人の書入と浚明書入が紛れて伝わったものか等、様々な

可能性が考えられる。

このように気になる点は多々あるが、ともあれ源義亮奥書から、浚明が校訂した『和字正濫要略』は次第に流布していったとはいえずである。宝暦年間には既に「頗有異同」であった『和字正濫要略』の本文を、最も詳細かつ慎重に校訂したのは浚明に違いない。では、時代が下るにつれて、浚明の奥書や書入を持つ本が信頼できる本として流布し、さらにそれを知った知識人が本を求める、という循環があつたのであろう。憶測になるが、その流れの中で、他の幾つかの奥書は不要なものとして、削ぎ落とされていったのではないだろうか。浚明奥書が尊重される余り、契沖・似閑以外の「某」や他の者の奥書がかき消されていったと仮定してみたい。

もしかすると広大本は、そのような形で流通した中の一本だったのではないだろうか。そうなると、修道館本は似閑から浚明までの奥書が省かれていく過程を示す一本なのかもしれない。広大本と修道館本の類似も気になるところである。

広大本の貼紙「山岡浚明大人朱書入」は、本文とは別筆と思われる。斎藤月岑が広大本を得たとき、既に貼られていたのだろうか。広大本の印記「湊市」が江戸の書肆須原屋市兵衛のものならば、その店で貼られたものなのかもしれない。

以上のように、未見のものも多々あり、断片的な情報から類推を重ねただけなのではあるが、書写者・書写年不明の広大本から、江戸時代、浚明という「存在」がどのように評価され、享受されてい

たのか、少し感じ取れるような気がするのである。

おわりに

『和字正濫要略』から契沖、似閑、荷田在満、春満、山岡俊明と和学者の繋がりが見えてくる。俊明が得た在満の本はどのようなものであったのだろうか。在満の得た一本が養父春満の自筆本であった可能性は大いにあるだろう。契沖の説は和学者達にどのように継承されて、明治時代、歴史的仮名遣として定着するようになったのか、『和字正濫鈔』と併せて『和字正濫要略』の流布を見ることによつて、国語学史の一片を探ることができよう。

文学研究からも興味深い点がある。例えば、国立国会図書館本・彰考館本の二本しか確認されていない『源仲正集』が〈引證書目〉にあげられている（広大本では「源仲正家集」と表記する）。源仲正は白河・鳥羽院政期の歌人で、源三位頼政の父。伝本はいずれも江戸末期書写である。実際に、契沖は【10】〈ひ〉「鯉」で「源仲正集」に「寄池鯉 こひしなはこひもしねとかなそもかくこやのいけすになふられてふる」を引いて検証をしているから、契沖の手許に『源仲正集』があったか、あるいは本が手にとれる環境にあったとみてよい。

物語研究の視点から見れば、物語の書写・注釈に勤しんだ俊明と源義亮が契沖の『和字正濫要略』で繋がるのが興味深い。例えば、『とりかへばや』の伝本系統の中には、俊明が校注をしたものがある¹⁰⁾。

俊明と和学者達の交流がその一端でも解明されることは、物語の貸借や書写状況、伝本系統を考察する上で収穫になるかと思う。

以上のように、『和字正濫要略』は広く流布したが故に、様々な研究視点を提示する資料だといえる。

最後に、本稿を成すにあたり、早大本・森文庫本がインターネット上で簡単に閲覧できたことが非常にありがたく、便利であったと述べておきたい。これから古典籍の電子化・公開によって、研究基盤の構築が推進され、新たな研究が切り開かれていくであろう。今後、「広島大学図書館貴重資料室蔵 古典籍データベース」がその一翼を担えればと願っている。

〔注〕

(1) この目録は当時学生や院生であった金子彰・牧野泰子・鈴木恵・松本光隆・田中雅和・原卓志・山本秀人・柴田朋子によって作成された。閲覧・複製を御快諾くださった広島大学文学研究科教授松本光隆先生に深謝申し上げる。

(2) <http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>

(3) 朝日版凡例は第七卷九〜一二頁、解説は第九卷「契沖傳」第二編書誌学的研究 第三章「三、和字正濫要略の本文と内容の特質」一七七一〜一八二頁（久松潜一）。岩波版解説は第十卷八二〇〜八二六頁（築島裕）。

(4) 早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」より。

<http://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>

- (5) 大坂市立大学学術総合センター「森文庫マイクロフィルム画像データベース」より。 <http://disv01.media.osaka-cu.ac.jp/Mori/>
- (6) 朝日版解説には、荷田春満自筆本は京都伏見稻荷神社に所蔵されているとある。似閑と荷田春満の交流を考える上でも、三手本と荷田春満自筆本の関係は興味深い。
- (7) 渡辺守邦・後藤憲二編『新編蔵書印譜』（日本書誌学大系七九 青裳堂書店 平成十三）一九七頁に同じ印が掲載されている。広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 末枡昌子氏にご教授いただいた。
- (8) 当時の広島大学と沖森書店の付き合いに関しては、浄瑠璃本コレクション「沖森文庫」を所蔵する広島文教女子大学の別冊『文教国文学 広島文教女子大学蔵沖森文庫目録 附古辞書目録稿』（平成十一）の横山邦治「沖森文庫」誕生追憶」に記述が見える。
- (9) 相原咲清香・赤迫照子・岡陽子編『源語類聚抄（広島大学蔵 下 翻刻平安文学資料稿 第三期第十卷 広島平安文学研究会 平成十五）、岡陽子「解題」より。
- (10) 『とりかへばや』伝本の研究には、西本寮子「誰が読んだのか —江戸時代の『とりかへばや』享受」（『日本文学』第五四号 平成十七・二）等や新居和美の一連の論考がある。